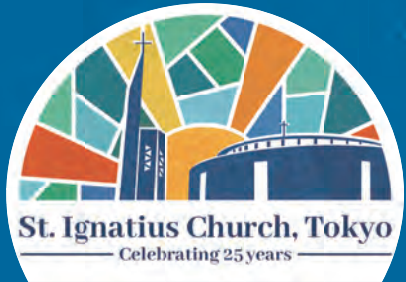


2月

カトリック麹町教会

MAGIS



St. Ignatius Church, Tokyo
Celebrating 25 years

マジス = 「より、もっと、さらに」

教会テーマ さあ出かけよう 心をつないで イエスとともに
~ともに重ねた25年の喜びのうちに 聖霊の導く未来へ~

聖年——希望の巡礼者

イエズス会日本管区長 佐久間 勲

神のいつくしみに

心を向ける

ローマの聖ペトロ大聖堂で聖年の扉が開かれ、罪のゆるしを受け償いに励む一年が始まりました。聖年は旧約聖書レビ記25章に記された「ヨベルの年」の習慣にさかのぼります。50年目にはあらゆる負債が免除され、人手に渡った先祖伝来の土地が本来の持ち主に返還され、借金のために身売りし奴隷になった人がもとの自由民に復帰します。すべての負債が帳消しになって本来のあり方、自由な人間に戻ります。聖年は、罪の負債から私

り方を取り戻させてくださる神のいつくしみに心を向ける時です。

私たちを取りまく世界に目をやれば、そこは戦争や環境破壊など悲惨さがつら世界です。人間の悪に深く傷つけられています。先の見通しも立たない悲惨な時代に、罪をゆるし、その傷を癒やしてくださるのは神のみです。人間とその世界を本来のあるべき姿へと回復してくださるのは神のみです。神のいつくしみに愛への希望を心に深く刻みつけて、今回の聖年のテーマ「希望の巡礼者」となるように、私たちは呼びかけられています。



を巡礼するという習慣は古いものです。それに聖フィリッポ・ネリが大切にしていた、7つの大聖堂を巡礼するという習慣も加わりました。7つもの大聖堂を巡るといっても実は、急い

で回れば午前中に7つ全部を回ってしまいます。しかし速さを競っても本来の巡礼にはなりません。スタンプラリーとは違い、ゴールよりは、むしろそこにたどり着くまでの道のりに意味と価値が潜んでいます。

ゆるされたからこそ…

「償い」を思い巡らせる

とある教会の助任司祭が黙想に出かけ、罪をゆるす神のいつくしみを深く感じ、喜んで帰ってきました。そして、感激のあまり自分の墓標を建て、「古い私は死んで、ここに葬られた」と刻みました。それをニコニコしながら見ていた主任司祭が、こう書き足しました。「そして三日後に復活した」。神のいつくしみに徹底的に心を閉ざすのでなければ、神は罪を無条件でゆるしてくださいます。他方、罪をゆるしていただく人間はいえ、罪を悔い、二度と同じ過ちを繰り返しません、と決心しても、その決心が生活や行動の仕方に反映されるまでには時間がかかります。罪の傷跡が癒えるまで、新しい生き方が日常の生活に浸透

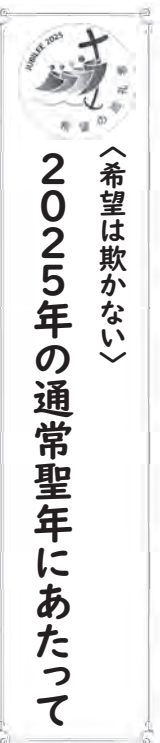
教会報 MAGIS 2月号	
† 〈希望は欺かない〉 聖年にあたって	P2
† 教会黙想会	P3
† クリスマスの行事とミサ	P4
† 現聖堂献堂 25 周年記念企画	P5
† 〈現聖堂献堂 25 周年記念連載〉 ⑧	P6
† つながるプロジェクト ③	P7

【2月の共同祈願】

聖年を迎えて祈ります。
希望の巡礼者である
わたしたちの中から、
夏のローマ巡礼を希望する
若者をお与えください。

【ミッション 2030 -前文-】

私たち聖イグナチオ教会は、
祈りに基づく使徒的共同体を生きていきます。
現代の社会は、命の軽視や孤独、過度の競争原理や格差、
環境破壊など、未来に希望を見出しにくい
反福音的なものに脅かされています。
それに対して、私たちは自分たちの殻に閉じこもることなく、
いつくしみの扉を開いていきます。
私たちは、同伴者イエス・キリストと心を合わせて、
貧しい人や弱い人の声を聴き、
皆でともに手をたずさえて(日本人も外国人も、若いも若きも)、
福音の喜びを分かち合っていく使命を生きていきます。



〈希望は欺かない〉
2025年の通常聖年にあたって

教皇フランシスコは大勅書『希望は欺かない』(左梓参照)を公布し、2024年12月24日から2026年1月6日を、2025年の通常聖年と決めました。バチカンの聖ペトロ大聖堂の「聖なる扉」が開かれ、聖年が始まりました。これから数回にわたり、「聖年」について深く掘り下げて解説していきます。

聖年とは

聖年は、全住民の解放を雄羊の角笛で宣言するため「ヨベル(雄羊の角「笛」)の年」と呼ばれ、50年ごとに祝われること、先祖伝来の所有地に、家族のもとに帰ることが、旧約聖書に記されていること。

「そして今、新たな聖年の時が来ました。
この聖年の間に聖なる扉が再び大きく開かれ、キリストにおける救いという確かな希望を心に呼び起こす、神の愛の生きた体験がもたらされます。」
(教皇フランシスコによる2025年の通常聖年公布の大勅書『希望は欺かない(2024年5月9日)』6)

ます(レビ25:9-10参照)。
聖年には、負債が免除され、奴隷は自由となり、土地は元の所有者に返され、貧しい同胞を助けること、すなわち、すべては神からの預かり物であることを思い起こして、愛を実行することとされています。そして、キリストはその宣教活動の初めに、この「主の恵みの年」がご自身において実現したことを宣言します(ルカ4:18-21参照)。
キリスト教において最初の聖年が1300年に祝われました。ローマ市民は聖ペトロと聖パウロの大聖堂を30回、市外からの巡礼者は15回訪問すれば全免償が得られました。1475年以降は25年ごとに通常聖年が開催されるようになりました。聖

年を象徴し、始まりに開かれる「聖なる扉」は、「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる」(ヨハネ10:9)という言葉によつて

モットー

2025年聖年のモットーは「希望の巡礼者」、中心となるメッセージは「希望」です。教皇フランシスコは大勅書の中で、「聖年が、すべての人にとつて、希望を取り戻す機会となりますように」と、使徒パウロの言葉「このキリストのおかげで、今の恵みに信仰によつて導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。……希望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によつて、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです」(ローマ5:2,5)によつて私たちが導きます。聖年の間、「キリスト者の希望の光が、すべての人に向けられた神の愛のメッセージとして、一人ひとりに届けられ、教会が、世界のあらゆる場所でこの知らせを忠実にあかし」(大勅書『希望は欺かない』6)し

て、「苦しい境遇のもとで生きる大勢の兄弟姉妹にとつて、確かな希望のしるしとなるよう求められます」(同10)

当教会も巡礼教会に

聖年には、聖なる巡礼(＊1)を行うことが勧められています。ローマを訪問できない信者のために、各教区に巡礼教会が設けられ、東京教区では、当教会を含めた次の15の教会が2025年聖年の巡礼教会として定められました(＊2)。

- 秋津教会、清瀬教会、小平教会、神田教会、北町教会、五井教会、麹町教会、関口教会(カテドラル)、関町教会、高輪教会、調布教会、築地教会、西千葉教会、八王子教会、松戸教会

＊1: 教皇フランシスコは、大勅書『希望は欺かない』において「巡礼が、聖年のすべての行事の基本要素(5)として、います。古代イスラエルの民は、エルサレムの神殿を巡礼していました。キリスト者もこの習慣を取り入れています。巡礼する人は、自分の体をもって祈り、自分の生涯が神に至るまでの長い旅路であることを、五感のすべてで体験しています(巡礼ハンドブック)。「聖なる巡礼」についての詳細は、教皇庁による「免償に関する教令」を参照してください。

＊2: 当教会の巡礼スタンプが主聖堂前に置いてあります。

教会黙想会



「聖年—希望の巡礼者」
—希望は欺かない—

昨年11月23日(土・祝) 10時から教会黙想会が主聖堂で行われました。アンドレア・レンボ司教(東京大司教区)のご指導のもと2部構成(講話・黙想)で実施。教皇フランシスコが今年の聖年の中心メッセージ「希望」に込められた願いを考えつつ、ミサも含めて約3時間の充実した黙想の時を過ごしました。以下は、その要旨です。(YouTubeにて現在も動画配信中)

はじめに高祖敏明主任司祭から挨拶がありました

第一部

「ジュビリー(聖年)とは温泉のようなもので、個人的、社会的にも傷のある場所が癒されます。ジュビリーは、ヘブライ語でヨベル(雄羊の角)。エルサレムでは、恵みの時の開始を告げるヨベルの角笛が、金曜日の夕方に嘆きの壁の前で安息日を伝えます。

十戒の掟おきての、最初の3つは、神に向かい、残りの7つは、社会に向けたものです。私たちの社会が十戒に基づけば、結果、社会に還元されるのではないのでしょうか。

かでも『隣人に対して偽証してはならない』は大事です。今はAI(人工知能)が活躍する世界になり、フェイクニュースで嘘が横行し、簡単に他人の人生を壊してしまえます。憂慮すべきことです。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』(ルカ10:27)とあります。神への愛と隣人への愛を合わせ持った答えです。聖年とは恵みの年で、その恵みに応じて、私たちは神への愛と隣人への愛で応えなければなりません。人生を変える機会です。難民問題



は戦争状態の国が存在するせいで起こります。真にイエスさまの恵みの年を実現させるためにカトリック信徒が一丸となり、どのようにして教皇の言葉を支えるか。私たちの信仰や生活のことをいつも考え支えてくださる教皇のことも考えて、祈りたいと思います。20分間の黙想の時を持ちました。

第二部

ルカによる福音書を引用した話の後、教皇フランシスコの文章をもとに聖年の特徴を紹介されました。

「『希望は欺かない』はローマの信徒への手紙5章5節からの引用です。教皇は現代の不確実性や社会的危機、紛争に対して希望を持つことの大切さを説き、聖年はそのチャンスであるとして、『信仰』『希望』『愛』と

りわけ現在には『希望』が重要と訴えます。

9月の新司教研修会でローマに行った折に『希望』に関して教皇に直接質問したところ、4つの柱を文章で示されました。以下、紹介します。

希望を持つために必要な4つの柱

1 平和と正義

正義を実現するため、国々に対話と交渉を求めます。平和と正義は自分の周りの環境から始まるので、平和な心になりましょう。

2 社会的な脆弱層への配慮

移民、高齢者、若者、貧しい人々への連帯や支援が必要で、特に貧困層に対して新たな社会的な連帯が求められ、食事の提供だけでなく一緒に食べ、徐々にその回数を増やすなどして寄り添いましょう。

3 キリスト教徒の一致とエキュメニズム

2025年は、東西のキリスト教徒が同日に復活祭を行います。ロシアとウクライナの戦争はキリスト教徒同士の戦争です。共通の信仰と交わりの象徴として、世

界のキリスト教徒の一致が期待されます。

4 ゆるしと和解

聖年はゆるしと和解の特別な機会です。これらを積極的にできるかどうかは私たち次第です。家族だけでなく、修道会、宣教会、小教区など。分裂が生じたところでは1年かけて実践しましょう。

聖年の扉について

聖年の大きなしるしは、聖なる扉です。その扉を通るとゆるしと癒やしを受けると言われ、伝統的に以下のローマの四大聖堂の扉が定められています。

- *サン・ピエトロ大聖堂
 - *サン・ジョバンニ・イン・ラテラノ大聖堂
 - *サン・パオロ・フォーリ・レムラ大聖堂
 - *サンタ・マリア・マッジョーレ大聖堂
- 10分間の黙想の時を持ちました。

ミサ

「王であるキリスト」の主日(祭日)ミサが、レンボ司教と高祖神父の共同司式で行われました。

クリスマスの行事とミサ

*は動画配信あり

主の降誕、おめでと〜いございます！

●クリスマスバザー

11月24日(日)8時半ミサ終了後、かつてのにぎやかさを取り戻すように、今年度の出展・協力は24グループでした。国際グループの調理品復活や教会学校中高生会と日曜学校の参加でさらに盛り上げていただき、個人協力者も初めてお願いました。皆さまのたくさんのご寄付をありがとうございました。100万円を能登の被災された教会復興へ、65万4817円をバレンシアの被災支援に向けてイエズス会難民サービス(JRS)へ送金いたしました。(2024年度クリスマスバザー実行委員会)

●子どもと家庭のクリスマスミサ

12月21日(土)14時

今年も楽隊の伴奏で聖歌を歌いながら、ミサが始まりました。聖劇が行われたあと、山内豊神父は皆に「あなたは今、何がほしいです



か」と質問され、「宝物」「洋服」「お金」「子どもたちの笑顔」など様々な答えが返ってきました。「人間の欲求はどんなに深く大きくなり、人間の力では叶えられない希望を持つことがあります。それを叶えてくれるのはイエスさまだけ。私たちの希望の限界を超えるためにイエスさまは来られました。希望の限界がきた時、イエスさまは本当に生まれてくれる。それが本当のクリスマスなんだと思います」と話されました。ミサの後は恒例のお楽しみ！子どもたちにサンタクロースからプレゼントが手渡されました。

●主の降誕夜半のミサ

12月24日(火)19時

キャンドルサービス*

(15時、17時もあり)

静けさの中、ろうそくに火をともし、主の降誕を祝うミサが始まりました。司式の高祖敏明主任司祭は聖歌「しずけき」の誕生物語とベートーヴェンの交響曲第9番を引用しながら、「創造主である父なる神と、争いや憎しみなどから解放されず、国籍、人種や言葉の違いを乗り越えることが難しい私たち人間。その神と人間を和解させた方を救い主と呼び、その救い主の誕生を祝福うのがクリスマスです。『いと高きところには栄光、神にあり。地には平和、御心にか



う人にあれ』(ルカ2:14)は、神と人との間に橋が架かったことを私たちに伝えようとしています。2つの歌を味わいながら、希望を新たにしたい生きた糧にしたいと思えます」と話されました。

●主の降誕日中のミサ

12月25日(水)10時*

(7時、8時半、18時もあり)

「『神の御子によって私たちに語られた』新約の時代も、民は言を受け入れず、『暗闇は光を理解しなかつた』と聖書は記します。しかし、今日のヨハネ福音書の後半には、『言は自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与える』とあります。神は預言者たちを通して語られた人間の救いを実現していきま

す。準備をして定められた時に御子を人間として送ってくださいました。その名を信じる人々に神の子となる資格を与えた。人間の血筋、家柄、知恵ではなく、「神によって生まれた」神の子にしてください。私たちに与えられたこの恵み、真理に感謝したいと思えます」と高祖神父は話されました。

●神の母聖マリアの祭日ミサ

1月1日(水)10時*

(0時、7時、8時半、18時もあり)

司式のハビエル・ガラルダ神父は、本当の自分について話されました。「人間は新しくなれないけれど、本当の自分に戻ることはできます。自分には浅い自分と深い自分がある。浅い自分はエゴイズムと高慢によって汚されています。私たちは大体この浅い自分とコミュニケーションをとっている。一方、深いところにも自分がいます。それは本当の自分。深い自分はその人の立場から物事を考え、その人のよいところを見ること



とができます。自分に戻るための一つの方法は祈りと深い自分がしたいことを問いかけること。その答えは『愛したい』。愛することは自分に戻る方法です」



〈現聖堂25周年記念企画〉

アルペ神父ってどんな人？ アルペ神父を通して自分を知る

酒井陽介神父（上智大学神学部准教授）

アルペ神父とは

「ペドロ・アルペ神父」をご存じですか。

スペイン出身のアルペ神父は1938年に来日し、広島長束修練院の院長だった時に原爆を体験。その後、イエズス会日本管区の初代管区長、第28代イエズス会総長となり、世界各国に原爆のこゝとや日本への援助、新しいイエズス会というものを訴えた方です。



ここに居続けることが良いとは言えません。アルペ神父は来日するまで、政治的な理由で国から国へと転々としてきました。日本でも東京、山口、広島と移り住み、さらには世界中を回りました。神

の呼びかけと社会状況に合わせて様々な場所に赴き、多くの人々と出会い、分かち合ったのです。

あなたは、心地よい場所や関係から踏み出したことがありますか。誰か、何が、そのあと押しをしましたか。振り返ってみてください。

アルペ神父はよく、ローマのイエズス会の総長室に靴磨きの少年を招き入れ、その少年の靴を磨いてあげていました。憐れみに突き動かされ、世間体や常識を超え、他者に向かつて一歩を踏み出す人でした。慣れ親しんだ場所を出て初めて、見える世界があるのです。

神に委ねる楽観性に学ぶ
1941年の真珠湾攻撃の直後、アルペ神父はスパイ容疑で投獄されました。恐れと孤独と寒さの中にあつたアルペ神父を支えたのは、彼が「魂の来客」と呼ぶ方と

の会話でした。来客とはもちろん神、あるいはキリストでしょう。彼は昼夜を問わず祈り、神との会話を深めていったのです。それは人生で最も学びの多い日々だったと言います。

あなたは神との祈りの時間を育んでいますか。生活の中で神と関わる時間、魂を神に捧げる瞬間を持っていますか。ぜひそうあってほしいと思います。

では次の問いかけです。1981年、アルペ神父は病に倒れ、話すことも歩くこともできなくなりしました。イエズス会総長として出席した最後の総会では、彼の次のような言葉が代読されました。「私は今、これまで感じたことがないほど、神の御手の中にいます」

私たちがここから学ぶことができるのは、「神に委ねる楽観性」です。神の力は人間の意思や理性を超え、人間の計算や予定や期待をも突き抜けて働きます。そこに賭けられるか、ということですね。

それには「不自由さ」を認め、受け止めているかが重要です。自分の不自由さを認


める時、委ねる生き方が始まるのです。

「現在にアーメン！ 未来にアレルヤー！」これはアルペ神父の有名な言葉です。今、神のみ旨があるように。将来どうなるかわからないけれど、神に栄光あれ。なんという楽観主義でしょう。この言葉を胸に刻みたいと思います。

最後にお願があります。アルペ神父の生き方から、今の私たちが学ぶべきことは何か。それをどんな形で引き受けることができるか。さらには、それをどのように次の世代に伝えていけるか。この3点についても考えてみてください。そうしてぜひ、アルペ神父の霊的遺産を皆さんの手で、未来につないでいただきたいと思います。



本稿は2024年10月6日（日）、現聖堂25周年記念の一環として行われた「アルペ神父さまってどんな人？〜アルペ神父の物語」と題した講話と分かち合いにおいて、酒井陽介神父がお話くださった内容を抜粋・編集したものです。なお、当日配布した小冊子「アルペ神父の物語」を増刷致します。希望者は3月9日（日）までに教会事務室にお申込みください。



（現聖堂25周年記念連載）⑧

時のしるしを読み解き 神の国に向かって歩む

栗栖徳雄さん（信徒・信徒養成講座担当）

外に出向いていくという

意識を養いたい

私は上智大学の一年生の時、1963年に洗礼を受けたのですが、当時の上智大学にはイエズス会士が大勢いらっしゃいました。ちょうどその頃に開かれた第二バチカン公会議（1962～1965年、以下「公会議」）について、30～40代の若い神父たちが熱く語っていて、「教会はこれから大きく変わる」と言っていたのが記憶に深く残っています。

後に調べたところによれば、それまでの教会はかなり現実離れしていたようです。乱暴なたとえになつてしまいかも知れませんが、教会というのは王国に権威付けをするところといった感じ

です。それが公会議によって、ようやく私たちの住む世界とつながったといえるかもしれません。

そういう時代があったことを思うと、2013年、教皇フランシスコが就任した時に言われた「私のために祈ってください」という言葉は、非常に新鮮でした。また、教皇は自己紹介の時によく、「ローマの司教」という言い方をされます。これは学校の級長といったイメージです。教皇フランシスコは常に「下からの教会」を意識し、私たちと同じ目線で、私たちとともに歩む、ということを伝えようとされているのだと感じます。

「教会は野戦病院であれ」。この言葉は、皆さんもよくご記憶のことだと思います

●栗栖徳雄さんプロフィール

1963年、上智大学内のクルトゥールハイム聖堂でロバート・フォーブス神父から受洗。2005年、山田經三神父の勉強会に参加。2015年、『教皇フランシスコ じっくりしみの教会』を翻訳し、明石書店より出版。2017年から聖イグナチオ教会にて、教皇フランシスコの回教や使徒的勧告をテキストに信徒養成講座を担当している。



栗栖さんが翻訳された『教皇フランシスコ じっくりしみの教会』

す。教皇が就任直後のインタビューや、来日（2019年）した時のミサなどで言われた言葉ですが、「社会とともにある教会」ということです。私たちは今、社会の中で生きていますから、教会の内にももってはいけな

自ら学び、探すという

姿勢を大切に

イエズス会のティヤール・ド・シャルダン神父が『現象としての人間』という本の中で、「私たちは今、オメガポイントに向かってともに歩んでいる」と書いています。

「オメガ」は、ヨハネの黙示録に出てくる言葉です。「わたしはアルファであり、オメガである」（一章8節など）。アルファは、ギリシャ語の最

初の文字。そして最後の文字がオメガ。つまり、「私たちは神の国に向かって、ともに旅する巡礼者です」という意味です。

現代はダイナミックな時代といえます。変動性、不確実性、複雑性、曖昧性、これが現代の特徴です。

自然についていえば、人間が支配できるという考えから、現在では自然と共生する方向へと理解が広がってきています。また、対立して議論をして真理に至るという二項対立よりも、時間をかけてお互いの話を聞き、対話をしながら進むべき道を見つけていく方向へと移ってきています。

こうした変化が、「時のしるし」として見えてくるといえます。私たちは今、ここに生きています。私たち信徒にとって大切なのは、聖霊の助けを願いながら、今生きている「時のしるし」を読み解く方法論をしっかりと身につけること。そして、オメガポイントに向かってともに歩んで

いくことではないかと思えます。

最後に、皆さんに3つの問いかけをさせていただきます。

- ①今、弱い立場に置かれている人は誰だと思えますか。
- ②あなたにとって、良い出会いとはどのようなものですか。
- ③あなたは「時のしるし」を見つけてましたか。

現代社会には気候変動や紛争、貧困や差別など様々な問題や課題があります

が、自ら学び、答えや解決策を見つけていくことが必要でしょう。これからのオメガポイントを見つめるためにも、探して学ぶという姿勢は大切だと思います。先の三つを、イエスのみこころに照らしながら、祈りの内に自らに問いかけてみてください。



ミッション2030プロジェクトチームでは現聖堂25周年を記念し、「世界のできごとを自分のこととして」をテーマに講話・黙想・霊における会話を行いました。本稿は2024年10月27日（日）の集いにおける栗栖徳雄さんのお話を抜粋・編集したものです。

つながるプロジェクト ③

2つのミサ

「つながるプロジェクト」第3回は11月10日(日)のベトナム語ミサ。今回は12名で参加しました。主聖堂は多くの若者の明るくホーリーなエネルギーに満ちており、とても新鮮でした。プロジェクトのベトナム共同体の窓口であるミンアインさんが、説教の日本語訳を準備してくださったおかげで、緊張することなく安心して参加できました。若者たちの伴奏と聖歌隊の歌声は美しく、ベトナム語の優しい響きに耳を傾け、爽やかな感動を覚えました。

司式のグエン・タン・ニャー神父はミサ前後に私たちに声をかけて下さり、会衆も拍手で歓迎して下さったことがとても嬉しかったです。

第4回のインドネシア語ミサは1月12日(日)、10名で参加しました。マリア聖堂はインドネシア語の優しい歌声に包まれ、暖かくフレンドリーな雰囲気でした。式次第や歌集にも分かりやすくご配慮いただき、また共同体のファレリ・アウレリアさんが

が歌の独特な譜面の読み方を教えてくださったおかげで、みんなで一緒に歌うことができました。説教も後半は日本語で話してくださいありがとうございました。平和のあいさつでは教えていただいたインドネシア語「Damai, Justice」(主の平和)を使い、喜びを共有しました。ミサに初めて参加した一人ひとりが自己紹介をし、みなで歓迎することが恒例のようでした。私たちも自己紹介をしたところ拍手で歓迎されました。そのアットホームな雰囲気心地よく感じられました。

ミサ後はアントニウス・ウィルマンシャー神父が私たち一人ひとりと握手し、言葉をかけてくださいました！

どちらのミサも、言葉の違いを超えた一体感を味わい、本当に大切な言葉ではなく同じ方向に向かって手を合わせる心であることを実感しました。いつもの聖堂が異国の香りに包まれる特別な体験、とても素敵な時間でした。

次回はポルトガル語ミサです(下記参照)。新たなつながりが生まれることを期待しております。

●宣教司牧評議会からのお知らせ●

(1月9日開催)

- 2025年度教会テーマが決まりました。「さあ出かけよう、心をつないでイエスとともに～希望に锚を下ろして～」です。テーマの詳しい説明は新年度号に掲載いたします。
- 2024年降誕祭前日、降誕祭当日のミサには、合わせて9,000名余りの方が参列されました。ご奉仕くださった皆さまありがとうございます。

●青年の祝祭 信徒派遣のお知らせ●

今年7月にローマで開催される「2025 青年 青年の祝祭」に当教会から若者たちを派遣します。応募資格、要領について詳しくは教会ホームページをご覧ください。



●財務報告●

- 10月20日(日)の「世界宣教の日」のための献金1,089,812円は、ローマ教皇庁に送られ世界中の宣教地に援助金として届けられます。
 - 11月17日(日)「ミャンマーデー」の献金1,237,071円を東京教区を通じてミャンマーの教会へ送金しました。
 - 12月1日(日)宣教地召命促進の日の献金1,350,031円はローマ教皇庁へ送られ、全世界の司祭養成のために使われます。
 - 2024年の司祭召命のための一粒会への献金は703,085円になりました。
- *皆さまのご協力に感謝いたします。

ペドロ・アルペ神父の列福祈願ミサ

開催日時：2025年2月11日(火・祝)13:00～
 場所：マリア聖堂
 司式：李 聖一神父
 主催：イエズス会日本管区本部
 *自由にご参加ください。

ミッション 2030 講話・黙想・霊における会話③
 「主よ、私たちに何をお望みですか」
 ～教会活動について考えてみよう(仮題)～

開催日時：2025年2月23日(日・祝)13:30～15:30
 場所：ヨセフホール
 お話：増田 健神父(聖クラレチアン宣教会/上智大学神学部講師)
 *詳細はポスター・チラシ等でご確認ください。

ミッション 2030 プロジェクトチーム
 【つながるプロジェクト】

～いろいろな言語の人たちとミサでつながろう～

日時：3月2日(日)12:30のポルトガル語ミサ
 場所：マリア聖堂
 定員：10名(申し込み先着順)
 *詳細はポスター・チラシ等でご確認ください。

●献血の報告●

昨年12月1日(日)に、2回目となる日本赤十字社による献血をヨセフホールで行いました。ベトナム共同体からの43名を含め、前回は上回る72名から献血いただきました。血液が不足しがちな冬場に、55名分もの400ml 献血を確保できるのはなかなかなくとも有難い、との声を赤十字社から頂戴しています。献血にご協力くださった皆さまに感謝いたします。

●新年炊き出し●

1月2日(木)に、今年で3回目となる新年炊き出しを福祉関連グループ有志で行いました。恒例のちらし寿司を用意し、缶詰や黒豆、お菓子などとともに、203名の方に配布しました。毎月の献米の寄付をはじめとする、皆さまのご協力に御礼申し上げます。

2月の典礼と行事

2 (日) 主の奉献の祝日	新受洗者と転入者のためのオリエンテーション 10:00 ヨセフホール
3 (月) 福者ユスト高山右近の記念日	
5 (水) 日本26聖人殉教者の記念日	2025年新春セミナー 平和を造る人は幸いである - 大軍拡に反対して - 18:30 ヨセフホール 「主よ、私たちはだれのところへ行きましょうか、あなたは永遠の命の言葉を持っておられます」 講師：大倉一美神父、青木登茂子（日本カトリック正義と平和協議会委員）
7 (金) 初金曜日	祈りの集い 19:00
9 (日) 年間第5主日	教会案内ツアー ① 10:30 ② 11:00 受付 9:30 ~
11 (火・祝)	ペドロ・アルベ神父の列福祈願ミサ 13:00 マリア聖堂 世界病者の日
12 (水)	傾聴ルーム 11:15 ~ 15:00 ヨセフホール 水曜ティーサロン 12:00 ミサ後
16 (日) 年間第6主日	日曜サロン・ミニオリエンテーション 11:00 ~ 12:30 ヨセフホール
19 (水)	クリプタに安置され2月に命日を迎える方々のためのミサ 12:00
23 (日・祝) 年間第7主日	ミッション2030 講話・黙想・霊における会話③ 13:30 ヨセフホール
26 (水)	傾聴ルーム 11:15 ~ 15:00 ヨセフホール 水曜ティーサロン 12:00ミサ後

主任司祭：高祖 敏明

助任司祭：ボニー・ジェームス
グエン・タン・ニャー
サトルニノ・オチョア
柴田 潔

協力司祭：ハビエル・ガラルダ
中村 健三
グエン・バン・テー
関根 悦雄

シスター：マルセラ・ロサス
(セントロ・ロヨラ)
フロール・フロレーセ
ジェスリン・ブエンディア
(ジョン・デ・ブリット イングリッシュセンター)

ミサ参加方法はホームページ、教会事務室で確認してください。

ミサの時間 Mass

【平日 Weekday】主聖堂 Main Chapel
7:00/12:00/18:00

【土、日曜日 Saturday & Sunday】主聖堂 Main Chapel
土曜 18:00/19:30 (Viêt Nam)
日曜 7:00/8:30/10:00/18:00
12:00 (English) /13:30 (Español) /
15:00 (Viêt Nam)

【月の第1日曜日 1st Sunday】
Our Lady's Chapel
12:30 (Português) /16:00 (Polski)

【月の第2第4日曜日 2nd & 4th Sunday】
Our Lady's Chapel 16:30 (Indonesian)

『マジス』へのご意見ご要望などのお便りは事務室までお寄せください。

カトリック麹町教会 (聖イグナチオ教会)

〒102 - 0083
千代田区麹町 6 - 5 - 1
TEL 03 - 3263 - 4584
FAX 03 - 3263 - 4585
<http://www.ignatius.gr.jp>



Linktree (リンクツリー)
リンクツリー (linktree) とは多
数のリンクをまとめて表示して
いるツールのことです。このQR
コードを読み取ると教会ホーム
ページ、教会ガイド、Twitter、
Facebook、Instagram、
YouTube へアクセスできます。